

Title	紀元二～三世紀の東地中海地域におけるシナゴグの建設： 考古学的遺構とユダヤ碑文の分析に基づいて
Sub Title	Construction of synagogues during the second and third centuries in the East Mediterranean region : an analysis of archaeological remains and inscriptional references
Author	藤澤, 綾乃(Fujisawa, Ayano)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.3 (2018. 2) ,p.89(313)- 116(340)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紀元二～三世紀の東地中海地域におけるシナゴークの建設

——考古学的遺構とユダヤ碑文の分析に基づいて——

藤澤綾乃

一．はじめに

ユダヤ人は長く離散の状況に置かれながらも、固有のアイデンティティを維持してきた。特に、一～二世紀においては二度の対ローマ戦争を経験し（一一五～一七〇年のキトス戦争を含めて三度と考える場合もある）、多くのユダヤ人が世界各地へと散らされた。そのため、彼らはシナゴークを拠り所として共同体を立て直していったとされる。この現象は、宗教的な少数派が異なる思想や文化を持つ社会の中でどのように独自のアイデンティティを形成していくのかを考える上で、非常に大きな示唆を与えてくれる。本稿は、ユダヤ戦争期からキリスト教公認期までの期間（二～三世紀⁽¹⁾）において、東地中海地域でシナゴークの建設がどのような状況にあったかを

歴史考古学的な視点で検討しようとするものである。

シナゴークは、一般に礼拝・聖書朗読・裁判・喜捨・宿泊所など多目的な空間として紀元前から利用されていたとされる。考古資料の中で最も古いシナゴークの言及は、エジプトのシェディアから出土した大理石柱の碑文（前三世紀後半）であり、プトレマイオス三世とその妻にユダヤ人らがシナゴークを献上したことが刻まれている（*Horbury and Noy 1992, no. 22*）。また、遺構ではギリシアのデロス島にあるシナゴークが最古とされ、その年代は紀元前二世紀と考えられている（*White 1987*）。このような状況から、一部の研究者は、シナゴークの起源がディアスポラ地域にあると主張している。⁽³⁾しかし、エルサレムからテオドトス碑文（前一世紀～後一世紀）が出土していることから、第二神殿時代にはすでにイス

ラエル／パレスチナ（以下、イスラエルと略⁽⁴⁾）にもシナゴグが存在したということを考慮する必要がある。

文献では、フラウィウス・ヨセフスの記録や新約聖書に第二神殿時代のシナゴグの存在やユダヤ人の宗教活動、第一次ユダヤ戦争による七〇年のエルサレム神殿崩壊が記されている。しかし、それ以降のユダヤ人の生活については歴史史料が少なく、バル・コホバの乱（一二二―一三五年）といった大きな出来事もディオ・カッシウスの記述や『ヒストリア・アウグスタ』、及びイスラエルから出土した考古資料によって断片的に確認できるのみである。⁽⁵⁾ バル・コホバの乱後のユダヤ人の宗教活動については同時代の文献が少なく、研究者間でも確かな理解が得られていないが、エウセビオスの『教会史』第四卷によれば、その反乱が終結した後、ハドリアヌス帝はエルサレムからユダヤ人を徹底的に排斥したという。⁽⁶⁾

その後、三二三年のいわゆる「ミラノ勅令」でユダヤ教も含めて信仰の自由が認められ、恐らくシナゴグの建設に対する禁制も緩和されたと思われる。この時期以降、ガリラヤを中心に多数のシナゴグが建設されていることは、このことの証拠であろう。また、ユリアヌス帝の時代（在位三三二―三六三年）には、ユダヤ人が

一時的にエルサレムに神殿を再建できるよう計画されることもあった。

考古学的には、現在までにイスラエルからは一世紀前後と四世紀以降に年代づけられるシナゴグ関連の遺構及び遺物が多数出土している。⁽⁷⁾ しかし、二―三世紀のシナゴグと考えられていた遺構は元々事例数が少なく、最近はそのらの建設年代も再検討されている。レヴァインはこの点について、二―三世紀はイスラエルにおいてシナゴグの改築期にあたるため遺構が確認されていないのではないかと仮説を提示している (Levine 2005, 183ff)。一方ディアスポラ地域では、二―三世紀のシナゴグ遺構とされるものも存在するので、本稿では両方の地域に目配りをしつつ、研究状況を整理し、同時期のシナゴグ建設の状況を明らかにしていきたい。

二．研究史

(一) シナゴグ遺構に関する研究史

一九五〇年代以降、ローマ・ビザンツ時代のシナゴグは、一般にアヴィ・ヨナの論考によって三つの型式に大別されていた。すなわち、(1) 二―三世紀のガリラヤ型（あるいは建築様式に由来してバシリカ型とも呼ば

れる)、(2) 三〜四世紀のブロードハウス(横幅広)型、
(3) 五〜八世紀のアプシス(後陣)型である(図1参
照⁽⁸⁾)。 (1) は、バシリカ型の建造物に裝飾されたファサ
ードやトーラーを納める聖

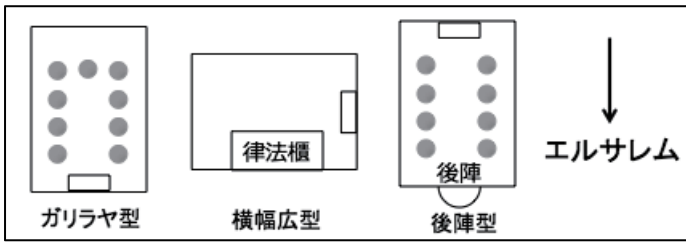


図1 シナゴグの型式分類

櫃として機能した移動式の木製具を備え、建造物の出入り口はエルサレムの方角⁽⁹⁾に向けられた。(2) は、エルサレムの方角へ向けてつくられたトーラーを納める祭壇(アエディクラ)またはニツチ(壁龕)を導入し、舗床モザイクの裝飾を施していた。(3) は、バシリカ型の建造物に半円形のアプシスや舗床モザイクを備えていた。

シナゴグに関する考古学的研究の始まりは、コールとヴァッインガーによるものである。彼らは一九〇

五年から一九〇七年にかけて、ガリラヤ地方とゴラン高原で十一のシナゴグの踏査と限定的な発掘調査を行い、成果を報告した(Kohl and Watzinger 1916)。ガリラヤのシナゴグは二世紀後半から三世紀初頭に建てられたと結論づけ、建築にはローマ帝国を中心に地中海世界各地で広く使われたバシリカ型が採用されたことを確認した。この見解はその後数十年にわたって定着した。一九三〇年代になると、地中海世界各地で発掘調査が行なわれ、スケニクは、六〜七世紀のシナゴグは二〜三世紀のシナゴグとは別の建築型式であることを明らかにした(Sukenik 1934, 27)。一九五〇年代には、ブロードハウスの遺構が確認され、アヴィ・ヨナによってシナゴグは三つの型式に分類されるようになった(Avi-Yonah 1961, 65)。

このように、初期の研究では時期毎にシナゴグの建築型式が異なっていたと考えられた。しかし、二〇世紀後半になると、出土例がイスラエル内外で急速に増え始め、これまでの型式分類による年代決定の方法があてはまらないことが明らかになってきた。特にガリラヤ地方では顕著であり、たとえば、長らくガリラヤ型と考えられてきたカペルナウムは五世紀以降に建てられたとされ

るようになった(後述参照)。ガリラヤ型のヒルベト・シエマとブロードハウス型のメイロン⁹のシナゴーグも、地理的に隣接し、同じ三世紀後半の層位に存在していることから、型式による年代決定が確実なものではないということが指摘されるようになった。さらに、ゴラン高原に位置するデイル・アジズのシナゴーグもブロードハウス型の建築であるにもかかわらず、ビザンツ時代の層位より発見された(Levine 2005, 320-321)。

(二) ユダヤ教碑文に関する研究史

シナゴーグの考古学的研究が活発になると、それともなつて碑文研究も盛んになった。ユダヤ碑文を集成した最初の研究者はフレイであり、その第一版はイタリアのローマ出土のものに限定されていたが、第二版では東地中海世界を網羅した集成が出版された(Frey 1936-37)。これがきっかけとなり、多くの研究者によつて各地域の詳細な碑文集成が行なわれるようになった¹⁰。

しかし、これまで収集・記録されてきた碑文資料の中には紛失したものや行方不明、あるいは所蔵先が不明のものも少なからず存在するため、年代決定や出土コンテキストが曖昧な場合もある。これらについては先行する

集成史料に頼るよりほかないため、数十年にわたつて同じデータが受け継がれてきている。とは言え、たとえばノイは欧州碑文についての研究史を非常に詳細な部分まで集成している(註(10)を参照されたい)。また近年は碑文情報のデジタル化によつて、地域の枠組みを越えた研究も行ないやすい環境が整いつつある。特にイスラエルの碑文についてはブラウン大学がデータベースを作成しており、オンラインで随時更新されている¹¹。

(三) 問題の所在

地中海世界で出土している古代シナゴーグの建築的特徴は多様性に富んでおり、立地も様々である¹²。すでに多くの研究者がこれらのシナゴーグに関心を持ち、イスラエル地域のシナゴーグに関してもディアスポラ地域のシナゴーグに関しても多くの研究が行なわれてきた。とりわけ、一世紀前後と四世紀以降のイスラエルのシナゴーグについては研究が活発である。たとえばハクリリは地中海地域全体のシナゴーグについて大著にまとめている(Hachlili 1988; 1998)。一方、二―三世紀に建てられたと考えられていたイスラエルのシナゴーグについては、近年の年代決定が再検討されるようになっており、その

性格及びシナゴーク建設がこの間どのように受け継がれたのかについては不明な点が多い。

本稿では、イスラエルとディアスポラの双方で知られている二―三世紀のシナゴーク遺構と関連碑文を改めて整理し、この間のシナゴークの建設状況について検討したい。

三、二―三世紀建造の可能性のあるシナゴークの遺構

(一) イスラエル

現在イスラエルでは、考古資料や文献史料によってローム・ビザンツ時代のシナゴークが一〇〇基以上確認されており、推定も含めれば一八〇基に上る (Levine 2005, 177)。図2では発掘調査によって実際に遺構が確認されているシナゴークを一世紀前後のものも含めて示した。¹³⁾

先述の通り、遺構の年代決定については二〇世紀後半より再検討の必要性が指摘されている。特に、ガリラヤ地方のシナゴークの年代決定については現在も活発に議論が交わされており、ハクリリはそれらの方法を三つに分けてまとめている (Hachlili 2013, 600)。

一つ目は、建築型式で決定する方法であり、ガリラヤ

のシナゴークは二―三世紀に年代づけられるという従来の説を継承している。¹⁴⁾ この考え方によって、カペルナウムのシナゴークは二―三世紀の遺構と主張されている。

また、いくつものシナゴークの発掘調査を担っていたメイヤーズは、上ガリラヤのシナゴークの大半は二―三世紀に建てられたと判断している。¹⁵⁾ 特に、ナブラティン第一期のシナゴークはバル・コホバの乱直後から二五〇年頃に成立し、二世紀には存在していたと述べる。¹⁶⁾ しかしこれらの調査は全てメイヤーズによって行なわれてきたものであり、かつ上ガリラヤのごく一部に集中していることから、より客観的な視点による調査が必要であろう。実際、マグネスはこれらを五世紀以降の遺構であるとし、仮にそれ以前の遺構が確認できたとしても、単に従来の型式学では証明できないと指摘している。¹⁷⁾ レヴァインも、シナゴークの建設は一般的に四世紀以降であり、それより早いとしても三世紀後半以前ではないと述べている (Levine 2005, 176; 187)。ベト・シェアリームのシナゴーク第一期は、ガリラヤで最も早く三世紀中頃に建設された可能性もあるが、最終報告がなされていないため明確ではない。¹⁸⁾ 少なくとも第二期が四世紀以降であったことは、放棄年代が分かっていることから確実である。

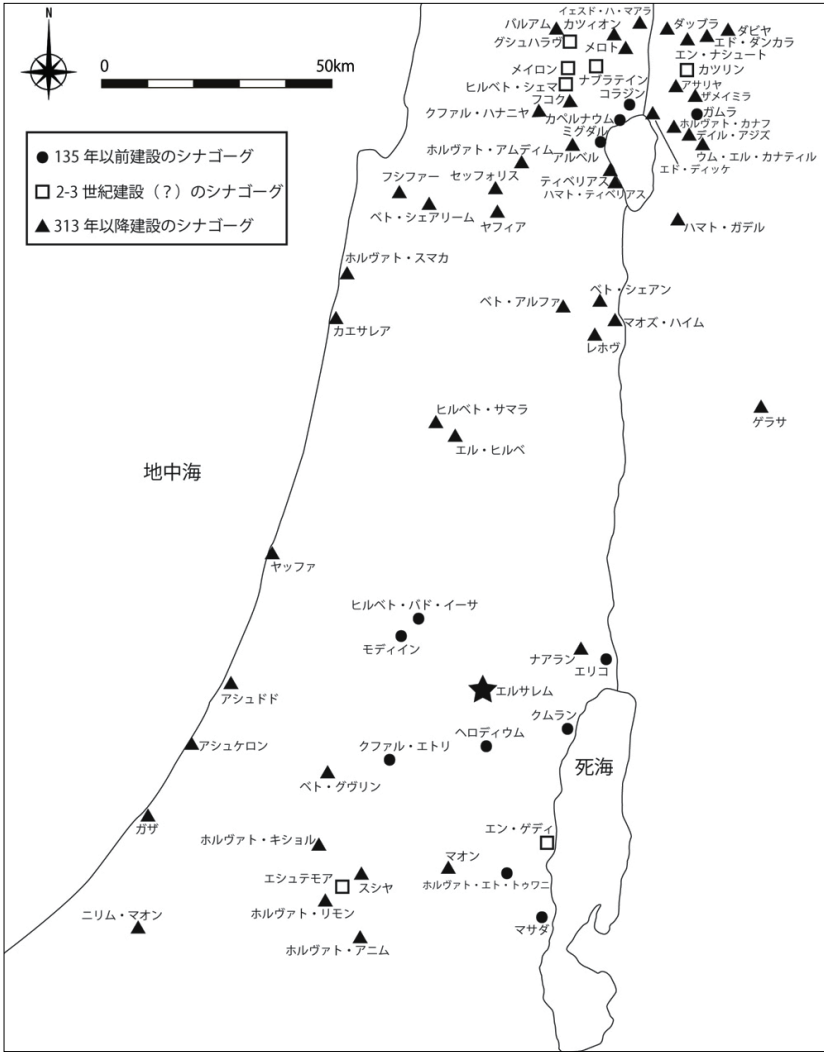


図 2 イスラエルのシナゴグ分布

二つ目の方法は、発掘調査で確認された相伴遺物や層位を主体とするため、建築型式や美術様式から判断することを基本的に避けている。マグネスもこの方法によって年代決定を行っており、カペルナウムのシナゴークが五世紀末に建てられたと主張している (Magness 2012, 308-309)。当該遺構については発掘者のロフレダも、貨幣の年代に則って五〜六世紀の遺構と結論づけている (Loffreda 1997, 223-244)。上記のような考え方は他のシナゴークにも該当し、グシユ・ハラヴやコラジンも五世紀後半のシナゴークであると複数の研究者が主張している (Netzer 1996; Magness 2001)。

三つ目は、先述の二つの方法を組み合わせ、再利用の建材 (スポリア) から年代を決定する方法で、一つの構造の中で異なる時代の建材が混在することについて追究している。たとえば、カペルナウムのシナゴークには二〜三世紀の建材が再利用されているため、その時代に遡ってシナゴークが存在したと主張されている (Meyers and Meyers 2010)。つまり、一つ目の方法を補完する結論である。

ガリラヤ地方以外のシナゴークについては、主にゴラン高原周辺とユダヤ地方のものが知られている。まずゴ

ラン高原のシナゴークの例としては、カツリン、ダビヤ、デイル・アジズ、エン・ナシユート、ホルヴァト・カナフ、ウム・エル・カナティル等が挙げられる。これまでの研究でカツリン以外のすべてのシナゴークが四世紀後半以降に年代づけられている。カツリンのシナゴークについては、発掘者のウルマンが層位や土器、貨幣などから総合的に判断し、二〜三世紀を建設の第一期としているが、マオズとキルブルは異論を呈し、メイロンから出土した土器と比較することで四世紀後半以降に建てられたという見解を示している。⁽²⁰⁾ 最近では、マオズらのようにゴラン高原のシナゴークを四世紀後半あるいは五世紀以降に年代付ける研究者が多い (Hachlili 2013, 603-605)。一方、ユダヤ地方の例としては、ホルヴァト・アニム、エシユテモア、エン・ゲディ、ガザ、マオン、ホルヴァト・マオン、リモン等が挙げられ、これらも殆どのシナゴークは四世紀以降に建てられたとされている。ただし、エシユテモアについては、イエイヴィンが三世紀後半〜四世紀に年代づけ、場合によってはそれ以前の可能性もあると述べている (Yeivin 2004, 135-138)。また、エン・ゲディの事例はバラグが三段階の建設時期に分けている。最終段階の五世紀後半に舗床モザイクが導

入されるなどの改修が行なわれたことは他の研究者も認めているが、第一期で二―三世紀とされる遺構がシナゴグであるかは確かではない。⁽²¹⁾このように、これらの二例も二―三世紀のシナゴグである確証は得られていない。

以上をまとめると、イスラエルで二―三世紀のシナゴグと考えられてきた遺構の多くは不確実なものであり、現状で明確にそう年代づけられるものは殆どないことが分かる。実際、わずかな一世紀の例を除くと、確実な遺構の大半が四世紀以降に建てられている。

(二) ディアスポラ地域

一方、ディアスポラ地域（本稿では、シリア、キプロス、トルコ、ギリシア、東欧諸国といった東地中海世界をディアスポラ地域と定義付けて扱う）におけるシナゴグには、あきらかに二―三世紀に建設されたとされる遺構が複数存在している（図3）。現在までにディアスポラ地域で発見されたシナゴグは、一世紀前後のものを含めて一四基あり、その他シナゴグの可能性があると考えられている遺構が八基存在する。⁽²²⁾事例数はイスラエルよりもかなり少ないが、最も注目すべき点は、発掘

調査やその後の検討によっても複数のシナゴグが二世紀から三世紀前半に年代づけられていることである。たとえば、ドウラ・エウロポスとストビのシナゴグの建設年代に関しては研究者間でも意見が一致しており、⁽²³⁾それ以外のフィリップポリス、プリエネ、サルデイスについても三世紀には建造物が宗教的に利用されていたと考える研究者が多い。そこで、これらの遺構について、これまでの調査結果や先行研究に基づいて概観したい。⁽²⁴⁾なお、それぞれのプランは図4にまとめて示した。

ドウラ・エウロポス（シリア）⁽²⁵⁾

当該建物は個人の邸宅をシナゴグに転用したものであり、第一期のシナゴグには、トーラーを納めるためのニッチ（壁龕）、ベンチ、そしてベマ（演壇）が設けられていた。遺構の年代は、出土碑文によって二四四年以前と同定されている。⁽²⁶⁾その後は二四四―四五五年に増築され、メインホール⁽²⁷⁾の壁には聖書の情景が描かれた。これはシナゴグの中では最も先駆的な事例である。イスラエルでは聖書の情景が建物に描かれるのは、一般に四世紀以降だからである。このシナゴグは長く利用されることなく、二五六―五七七年のササン朝ペルシアの侵攻

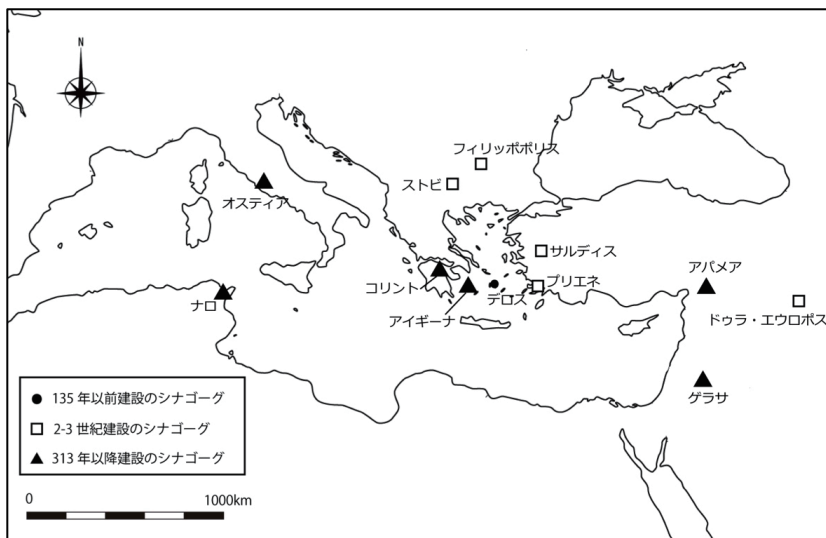


図3 ディアスポラのシナゴグ分布

によって破壊された。

ローマ時代に入ってからドゥラ・エウロポスはバルテ
 イアとローマの支配の狭間にあったが、一六四年に再度
 ローマ領となつて以来、その軍事都市として重要な役割
 を果たしていた。当該遺跡ではシナゴグの他に、キリ
 スト教徒の家の教会やミトラエウム、ゼウスやアルテミ
 スなど地域の神々に捧げる神殿も確認されている。ドゥ
 ラ・エウロポスのユダヤ人は、極めて異教的な空間にあ
 りながらもシナゴグの伝統を維持していたと考えられ
 る。

ストビ（マケドニア）⁽²⁸⁾

町の中心地から発見された三廊式のバシリカは、十字
 架の彫刻が施された柱やキリスト教関連の墓石が近隣か
 ら発見されたものの、建物がエルサレムの方向を指して
 いることやユダヤ教碑文の出土からシナゴグと同定さ
 れた（Noy 2004a, 57）。しかしこの解釈は、出土碑文を
 再利用だとするキツィンガーの主張により再検討され、
 一九六三～六五年の修復作業時にバシリカ直下の層から
 モザイクが確認されたことで、出土碑文はバシリカ以前
 の時期のものだと結論づけられた（Noy 2004a, 57）。一

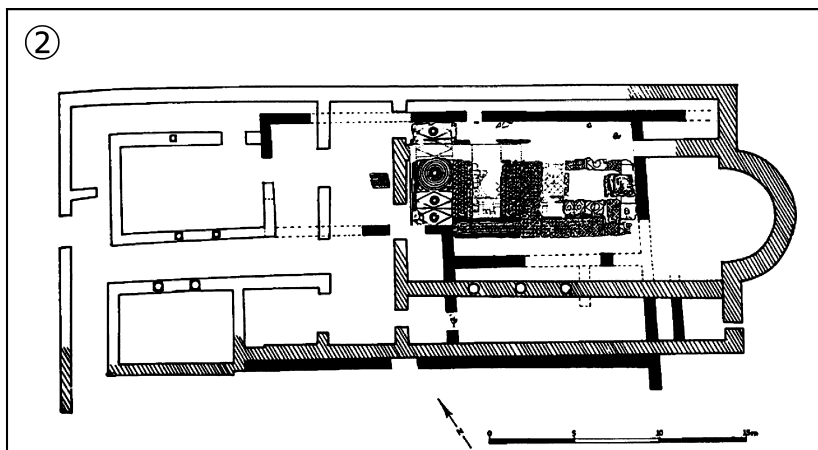
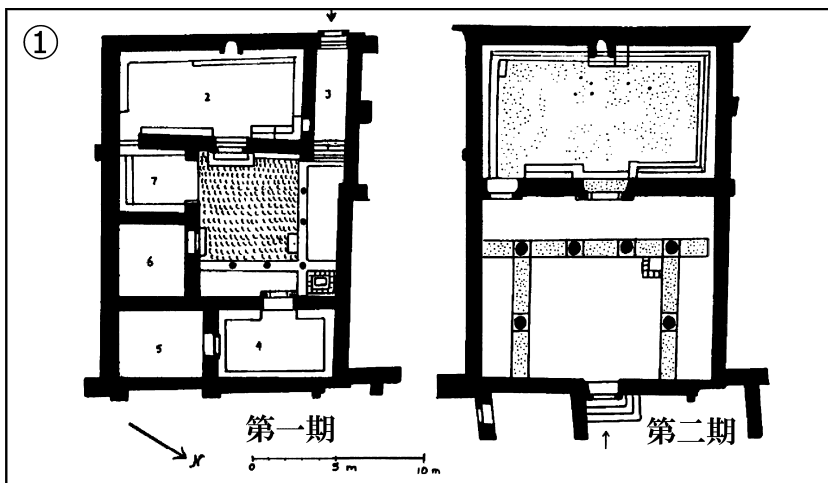
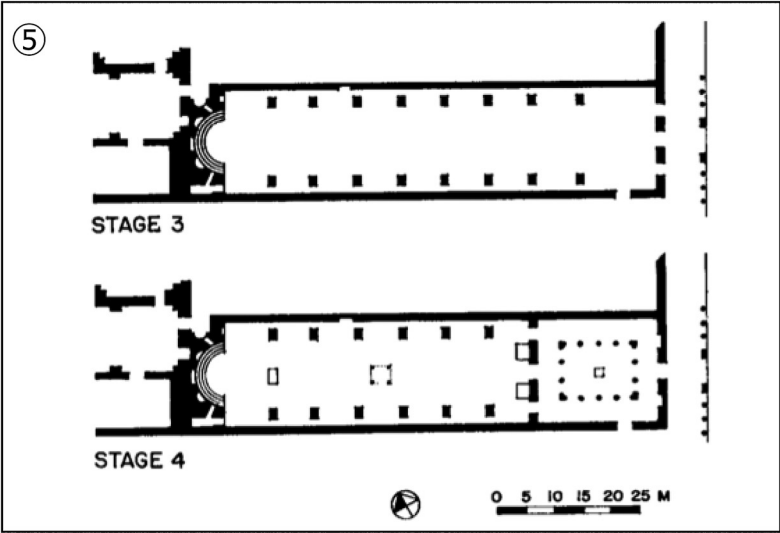
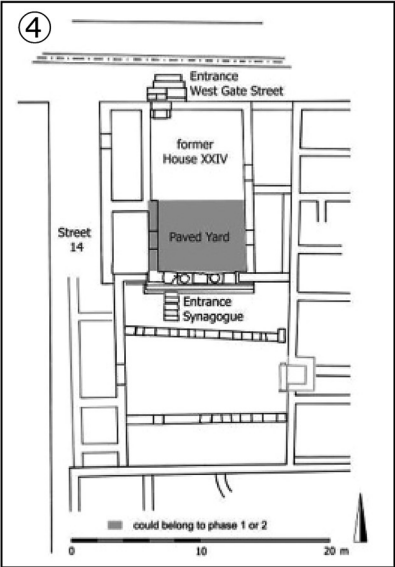
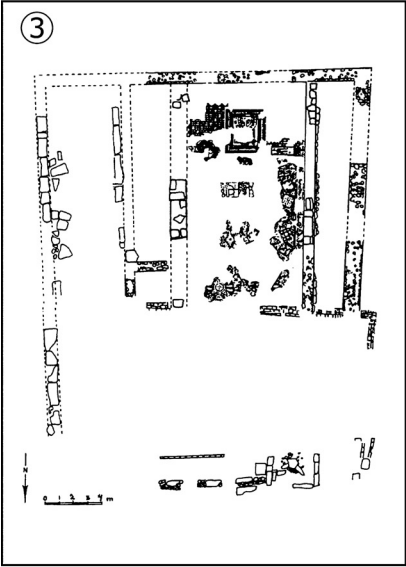


図4 2-3世紀ディアスポラ・シナゴグのプラン

- ① ドゥラ・エウロボス 第一期・第二期 (Hachlili 1998, 44)
- ② ストビ 第二期 (黒塗り部分がこれに該当、第一期の構造は不明) (Hachlili 1998, 65)
- ③ フィリップポリス (Hachlili 1998, 56)
- ④ プリエネ 第二期 (Burkhardt and Wilson 2013, 191)
- ⑤ サルデイス 第三期・第四期 (Hachlili 1998, 60)



九七〇年代になると、ワイズマンとマノ・ツイッスイによる調査で遺構は三つの時期に区分され、シナゴークとしての利用は二・三世紀に年代づけられる第一期⁽³¹⁾とそれ以降の第二期（四世紀前後）であることがわかった。第二期では部分的に第一期の基礎を再利用しつつ、建物を拡張している。また、ベマ（演壇）と思われる構造が確認され、メノラーのグラフィティが三つ出土したこと⁽³²⁾から、第二期もシナゴークであったとされている⁽³³⁾。第三期は四世紀後半から五世紀頃で、この時期にはじめてバシリカ型の教会堂に転用された。ユダヤ教徒とキリスト教徒の関係性については定かではないが、キリスト教徒によって強制的に所有権が代わったとする見解と、そうではないとする見解に分かれている⁽³⁴⁾。バルカン半島や小アジアにおいては、ユダヤ教的遺構とキリスト教的遺構が隣接して存在する事例もあることから、後者の言うように必ずしも対立関係ではなかったかもしれない。

フィリップポリス（ブルガリア）⁽³⁵⁾

当該シナゴークは、主要な公的建造物に隣接し、複合建造物の一部に残存している（Levine 2005, 269）⁽³⁶⁾。長方形の空間の南側部分からユダヤ教関連の舗床モザイクが

出土したことから、建物の用途は特定された。シナゴークの周辺には居住区が広がっており、二五〇年のゴート族の侵入によって破壊された形跡がある。そのため、これらの居住区はそれ以前の遺構と考えられており、この一画に位置するシナゴークも周辺住居と同様に二五〇年以前から存在したと考えられている。その後は、四世紀前半に修復されたものの、五世紀前半に建物は荒廃し、別の建物に改修されている（Noy 2004a, 38-40）。

舗床モザイクは三つのパネルに分かれている。中央のモザイクには、メノラーに加えて四種類の植物、すなわちエトログ（クエンの実）、ルラヴ（ナツメヤシの若芽）、ハダス（ミルトスの枝）、アラヴァー（柳の枝）が描かれ、その周りには幾何学文様が施されている（Noy 2004a, 39-40, Plr 2）。メノラーの下部には「プロノイア（*προνοία*）⁽³⁷⁾によって、エリオス（*Ελιος*）⁽³⁸⁾、またの名をイサク（*Ισαάκ*）が一二〇フィートの装飾を施した。」と記されている（Noy 2004a, 46）。当該碑文は四世紀前半に年代づけられた。中央パネルの両端（東西）には、より古い時期の舗床モザイクとされるパネルが二つ発見されており、それぞれにタブラ・アンサータ型の碑文を確認できる。それらには「プロノイア（*προνοία*）によつ

て、コスミアノス (Κοσμιανός⁽³⁹⁾)、またの名をヨセフ (Ιωσήφ) が設けた。全ての者に幸あれ。」と二つとも同じ文章が記されている (Noy 2004a, 41-42, Thr 1)。碑文の字体から三世紀に年代づけられた⁽⁴⁰⁾。

プリエネ (トルコ)⁽⁴¹⁾

当該建造物は一九世紀末期に発見され、ヴィーガントとシュレイダーによって公表され、「家の教会」と考えられていた⁽⁴²⁾。しかしユダヤ的シンボルを表す遺物が二点出土したことから、のちにスケニクがシナゴークと同定した (Sukenik 1934, 42-43)。ホワイトは、ヘレニズム時代の個人邸宅が二世紀から三世紀の間にシナゴークへと転用されたと述べている (White 1997, 328-330)。二〇〇九年からの発掘調査で土器やガラス、ランプ、貨幣など多くの遺物が出土したことから遺構の性格が明らかになり、概ね三つの時期区分に分けられた。すなわち、ヘレニズム時代 (第一期)、二〜三世紀のローマ時代 (第二期)、四世紀以降のビザンツ時代 (第三期) である。第一期の個人の邸宅は、プリエネで確認された中で最も大規模なものの一つであり、その構造は明らかに周辺の集合住宅とは異なっている⁽⁴⁴⁾。第二期の年代決定は、第三

期の床直上から発見された土器、貨幣などの遺物が四世紀のものであったことに基づいている (Burkhardt and Wilson 2013)。なお、第二期にはニッチ (壁龕) が確認されており、シナゴークとしての機能を示している。

サルデイス (トルコ)⁽⁴⁵⁾

当該シナゴークは、他地域と比べて特異な事例である。というのも、先述の諸シナゴークは私的建物を改修したものであるが、サルデイスの場合はローマ時代の公共浴場とギムナジウムの一部を改修して利用されているからである。また、東方宗教との関わりが根強く残る都市の中心部に位置していることも、注目に値する。建造物は、第一期のギムナジウム、第二期の市のバシリカを経て、第三期 (三世紀) よりシナゴークとして機能し、その後、現存する第四期の構造 (四世紀以降) になっている⁽⁴⁶⁾。この時期に前庭とメインホールは壁で仕切られ、後者には舗床モザイクや二つのアエディクラが導入された⁽⁴⁷⁾。全長八メートルにも及ぶ当該遺構は、地中海世界最大規模であり、イスラエルでもこれ以上のシナゴークは未だに発見されていない (Levine 2005, 261)。なお、第三期は二世紀後半から四世紀初頭のコインが大量に出土したこ

とによつて年代づけられた。第四期の前身となるこの構造からは碑文の破片も確認され、この (Seager 1972, 432-433)。

(三) 小結

イスラエルにおいては、先述の通りシナゴグの年代決定が見直されており、大半は四世紀以降に建てられたと考えられているのに対し、ディアスポラ地域にはあきらかに二―三世紀に建造されたシナゴグを複数確認することができる。それぞれの建造物内にはトーラーを納める場所やベンチが設けられ、ドウラ・エウロポスにおいてはベマ(演壇)の遺構も明確に残存している。シナゴグと同定するための重要な指標となるメノラーのグラフィティが出土した遺跡も複数存在する。多くの事例は住居を改修しており、外観からはシナゴグとわからないような構造になっていた可能性もある⁽⁴⁸⁾ので、同時代の「家の教会」と似ているかもしれない。しかし、サルデイスのシナゴグは、都市中心部に存在し、ローマ時代のギムナジウムの一部を改修して成り立っていた。こうしたことから、ディアスポラ地域の少なくとも一部では、二―三世紀に宗教的な活動の中心としてシナゴグ

がより自由に機能していたと言えるのではないだろうか。

四・ユダヤ碑文に関する分析

三章では、地中海全域におけるシナゴグの出土状況と各々の特徴について整理し、ディアスポラ地域では二―三世紀にもシナゴグが建設されていた可能性が高いことを確認した。四章では碑文に着目し、地域・時代毎に分析をして、その傾向を確認する。その上で、「シナゴグ」の建設について言及している碑文に考察を加えたい。ただし、碑文には名前や役職などが記されていることはあっても、具体的な年月日がわかるものは殆どなく、そのため書体や使用されている語彙、碑文の材質によつて年代を決定される場合が多い。先述の通り、碑文データは先行研究を引き継いでいるものが多く、原資料が現存しないことさえある。そのため本稿でもこれまでの研究で採用されてきた年代決定に基づくよりほかない碑文研究はこれまでも綿密に行なわれてきたが、本稿は特に二―三世紀に年代づけられ、シナゴグに関連する言及の見られる碑文に着目したい。

(一) 出土碑文の性格について

まず、地中海世界の出土碑文に一定の基準を設け、種類・時代毎に表1のように整理した。分析は、イスラエル（ブラウン大学のデータベース *Inscription of Israel / Palestine* <http://cds.library.brown.edu/projects/Inscriptions/index.shtml>）、ギリシア・東欧（Noy 2004a）、シリア・キプロス（Noy 2004b）、トルコ（Ameling 2004）を対象にした。まずその目的によって分類し、墓標の機能を果たしているものを墓碑、建造物や何らかの物を奉るものを奉献碑文、宗教的な祈りの要素やそれに准ずる記念をしているものを祈禱・記念碑文、条例や取り決めが為されているものを法令碑文、そして上記のどれにも該当しないものをその他とした。その他の碑文は、種類を特定できない碑片やグラフィティが大半であるが、中には里程碑や詩、呪いの碑文等の少数事例も含まれる。なお、文字自体が欠けている等の理由でコンテキストが不明の碑文は分類が出来ないため、不明とした。

以上の結果、ほとんどすべての地域で墓碑と碑片が圧倒的に多いことがわかった。なお、イスラエルにおける二～三世紀の墓碑の大半はベト・シエアリームの出土である。ベト・シエアリーム遺跡については本稿では詳しく

く言及しないが、ミシュナの編纂者であるラビ・ユダ・ハナスイ（一三八～二一七年頃）の墓所として有名であり、その後多くのユダヤ人がこの地に埋葬されていたことが考古学的に知られている。

奉献碑文には、本稿の主眼であるシナゴークの建設について言及する碑文が複数確認できる。とりわけイスラエルからは一八二点確認されており、墓碑同様に出土数が多い。しかし時代毎に見ると二～三世紀には五つしか確認できず、シナゴークの存在を暗示させる碑文はベト・シエアリーム出土の三点のみである。ただし、それらはパンフィリアやベイルートのアルキシナゴースと記されていることから、ベト・シエアリームのシナゴークについて言及しているのか定かではなく、建物に言及しているのかどうかも不明である。そもそも、ベト・シエアリームの碑文の年代はブラウン大学のデータベースによって二〇〇～四〇〇年と幅広い年代で提示されているので、確実に二～三世紀の碑文であると言い切れない。一方、イスラエル以外では二～三世紀に年代付けられる奉献碑文にシナゴーク建設について言及するものを複数確認することができたので、詳しく後述したい。

祈禱・記念碑文と法令碑文はどの地域においてもそれ

ほどの割合を占めないが、ユダヤ教徒の平和を願う内容として「シャローム(שלום)」とヘブライ語で刻まれているものがイスラエル以外でも確認された。全体的にギリシア語の碑文が多い中、文中で「シャローム」と繰り返し使用されている事例もある。

(二) シナゴーグの建設に関する二―三世紀の碑文⁽⁴⁹⁾

表1で示すように、総碑文出土数はイスラエルが圧倒的に多い。しかし、シナゴーグの建設について示す二―三世紀の碑文に焦点を絞った場合、イスラエルでは事例が確認できなかった。先述の通り、ベト・シェアリーム出土の碑文にはアルキシナゴーグスについて記されているが、いずれもディアスポラ地域由来と考えられ、加えて墓碑として機能していることからシナゴーグの建設については有益な情報が得られない⁽⁵⁰⁾。また、シナゴーグを指すヘブライ語のベト・クネセト(בית קנעסות)やその他の用語も、二―三世紀の碑文には一つも知られていない。しかし、ディアスポラ地域からはシナゴーグ建設に関する碑文を複数確認することができる。本稿ではそれぞれに注目し、検討を深めたい。

ストビ出土の碑文⁽⁵²⁾

現在のマケドニアの中心部に位置するストビから出土した碑文は、シナゴーグの建設について最も明確に言及している。以下はノイ(Noy 2004a, 63)による解釈を邦訳したものである⁽⁵³⁾。

「[...] クラウディウス・ティベリウス・ポリュカルモス (Κλ. Τιβέριος καὶ κλυαυρίος)」、またの名をアキリオス (Ἀκτύριος) は、ストビのシナゴーグの父(πατήρ τῆς ἐν Στόβοις συναγωγῆς)である。私はユダヤの規定に沿って生涯を過ごし、全ての祈りにおける聖なる場所としての建造物、トリクリニウム、テトラストーンを、自身の財産によって、奉納された資金を使用することなく、所有している。建造物上階の右側の所有は私自身にあり、クラウディウス・ティベリウス・ポリュカルモスと私の相続人の生活のためにある。もし私の決定を変える者がいるならば、二五〇〇〇デナリウスをパトリアルク(πατριάρχης)に渡すことに私は賛同する。上階の天井のタイルの維持は、私と相続人に与えられるであろう。

当該碑文は、先述の通りシナゴーグと同定した遺構の

表 1 各地域における碑文の種類別出土傾向

地域	種類	～第二次ユダヤ戦争 (135 年)	2-3 世紀	ミラノ勅令 (313 年)～	不明	計
イスラエル・ ヨルダン	墓碑	263	253	115	32	663
	奉献碑文	120	5	56	1	182
	祈祷・記念碑文	0	0	5	0	5
	法令碑文	5	0	0	0	5
	その他(碑片・グラフィティ)	398	3	13	0	414
	不明	64	0	6	1	71
シリア・ キプロス	墓碑	3	23	10	7	43
	奉献碑文	1	8	20	1	30
	祈祷・記念碑文	0	2	4	3	9
	法令碑文	0	0	0	0	0
	その他(碑片・グラフィティ)	1	45	1	0	47
	不明	4	2	1	6	13
トルコ	墓碑	3	73	16	18	110
	奉献碑文	2	10	2	0	14
	祈祷・記念碑文	1	1	3	1	6
	法令碑文	0	0	0	0	0
	その他(碑片・グラフィティ)	0	0	89	3	92
	不明	2	9	18	2	31
ギリシア・ 東欧	墓碑	10	29	30	3	72
	奉献碑文	2	3	6	0	11
	祈祷・記念碑文	11	4	1	0	16
	法令碑文	4	0	0	0	4
	その他(碑片・グラフィティ)	0	0	3	0	3
	不明	1	1	3	2	7
総確認点数						1848

主柱に刻まれていた。遺構は後の調査でバシリカ型の教会堂であることがわかったため、柱自体はバシリカ直下のシナゴーク由来であり、のちに教会堂で再利用されていたとされている。アキリオス（添え名）、ポリュカルモス（家族名）は独特な名前であり諸説あるが、クラウディウス（氏族名）、ティベリウス（個人名）がローマ的な名であることは明らかである（Noy 2004a, 65-66）。また、「シナゴークの父」の役職に就いていたとされるが、当該碑文では「ストビの」と限定されており、この地のユダヤ教徒であることを強調しているようにも捉えられる。なおストビ以外では、ローマで九点、マウレタニアで二点出土しており、「父（パテル）」とだけ記し、且つシナゴークと関連している碑文はマンティネイアやスミルナ、オスティアで確認されている（Levine 2005, 429-431）。

当該碑文は、聖なる場所の他にトリクリニウム（食卓）やテトラストーン（勉強部屋⁽⁵⁴⁾）の存在も記しており、シナゴークが複合的な建物であったことを表す貴重な資料である。また上階はポリュカルモスと家族のための部屋であることから、公的空間と私的空間が一つの建物の中に存在していた。しかしながら、上階の遺構だけ

でなくトリクリニウムやテトラストーンと考えられるような遺構も考古学的には確認されていない（Noy 2004a, 68）。

後半部分では、「パトリアルク（πατριάρχης）」の存在についても示されている⁽⁵⁵⁾。当該碑文が三世紀と年代づけられるならば、ディアスポラ地域のシナゴークにこの時代のパトリアルクが影響を与えていたことを意味している。加えて、ストビにおいてはシナゴークの所有権を持つためにパトリアルクに寄付の意志を示さなければならぬという点で非常に興味深い。しかし、この決まりが現実的なものであったかについては疑問がある。

マルモルシュタインは「高額の寄付は三世紀のインフレの影響」と述べている（Marmorstein 1937, 380）。一方ノイは、「インフレであったとしても、非現実的な数字であり、この一文はポリュカルモス以外の人物に相続の権利がないことを暗示している」と見解している（Noy 2004a, 70）⁽⁵⁶⁾。確かにマルモルシュタインが述べるように、家や土地を購入するためには大金が必要であり、現代の価値観で言えば二五〇〇〇デナリウスは荒唐無稽な金額とは言い切れないかもしれない。しかし、ストビからそれほど遠くないフィリップやテッサロニキの墓碑には

更に非現実的な数字が示されていることから、ノイが述べるように抽象的な数字であった可能性も大いに考えられる。どちらの見解であれストビの事例から言えることは、離散したユダヤ人が単に寄留地で独自のコミュニティを築いていたのではなく、パトリアルク存在を記し、ユダヤ教への忠誠心を示していたということである。

フォカシア出の碑文⁽⁵⁸⁾

二〜三世紀のシナゴークの建設に焦点をあてた場合、ストビの碑文は残存するものの中でも最も具体的な情報を与えてくれるが、現トルコのフォカシアから出土した碑文もシナゴークの建設に関わる内容に加えて豊富な情報を示している。以下はアメリング (Ameling 2004, 163-164) による解釈を邦訳したものである。

エンペドーンノス (Ἐνπεδοῦνος) の息子であるストラトーンノス (Στρατόνος) の娘タティオン (Τατίων) は、自身の財産によって建造物と (庭の) 囲いを建て、その後ユダヤ人らにそれを与えた。シナゴークは、エンペドーンノスの息子であるストラトーンノスの娘タティオンを金の冠と一つの高い地位でもって称えた。文面から判断する限り、タティオンという女性がユダ

ヤ人共同体と関わりがあったことは言うまでもない。父ストラトーンノスと祖父エンペドーンノスについて繰り返し記していることから、場合によっては先代からユダヤ人と関係のある家族であったか、あるいは当該一家がユダヤ人であった可能性もある。研究者間では、「ユダヤ人らにそれを与えた」と、敢えてユダヤ人の存在を明示しているという点から、タティオンは異教徒だったのではないかという意見と、安息日等を先導する立場に異教徒がなることは基本的には考えられないために、タティオンはユダヤ人であったという意見に分かれている (White 1997, 325)。なお、当該碑文もストビの碑文と同様に、「自身の財産によって」と刻まれ、建物を奉献したことを明示している。遺構が確認されていないため、建物の規模はもとより実存したのかについても明らかではないが、ユダヤ教徒たちにとって大変名誉な行為と捉えられていたと推測できる。

五・結び

本稿では、イスラエルとディアスポラ地域におけるシナゴーク遺構について概観し、出土碑文を検討することで次のような知見を得ることができた。まずイスラエル

では、シナゴークの年代決定が見直されたことによって、明確に二―三世紀に存在したとすることができるとする遺構は一つもないということである（上ガリラヤのシナゴークについては、メイヤーズが二―三世紀に年代づけるものが数基存在するが、これにも異論がある）。加えて、シナゴーク建設を直接的に表す碑文もイスラエルでは一つも確認できていない。たしかにイスラエルではサンヘドリンの存在やミシュナの編纂について記されたラビ文献が多くあるため、ユダヤ人の存在は否定できないし、シナゴークもまったく存在しなかったとは言えない。レヴァインが述べるように、二―三世紀はシナゴークの改築期であった可能性もあり、考古資料に表れないような小規模且つ宗教性を全面的に表現しないシナゴークが存在したのかもしれない。しかしこの時代のシナゴークの明確な考古資料が存在しないことは注目すべき現象であるう。

一方、ディアスポラ地域の一部には、数は多くないものの、二―三世紀のシナゴーク遺構やシナゴークの建設に言及する碑文が存在する。調査密度の違いはあるものの、これらの資料は、ディアスポラ地域ではシナゴークが比較的自由に建設できた場合があることを示している。

建物の内装についても、ディアスポラ地域の一部のシナゴークではニッチ（壁龕）が早い段階で採用されていた可能性がある。イスラエルでは、四世紀以降にアエディクラやアプスがシナゴークに導入されていく傾向があるので、ディアスポラ地域のシナゴークで発達した構造がその前身となったのかもしれない。

以上をまとめると、ディアスポラ地域には二―三世紀にもユダヤ人が比較的自由に宗教活動を行なえた場所があった可能性がある。つまり、七〇年以降におけるローマ帝国のユダヤ人弾圧は、イスラエルではかなり徹底的に為されたものの、東地中海全土で同様に行なわれたわけではなく、一部地域では比較的寛容に対応されていた可能性を考えることができる。

参考文献

- Ameling, W. 2004 : *Inscriptiones Judaicae Orientis*, II : *Kleinasiens*, Tübingen.
 Ameling, W. ed., 2011 : *Corpus Inscriptionum Judaicarum/Palastinae*, vol. 2, *Caesarea and Middle coast* : 1121-2160, Berlin.
 Ameling, W. ed., 2014 : *Corpus Inscriptionum Judaicarum/Palastinae*, vol. 3, *South coast* : 2161-2648, Berlin.
 Avi-Yonah, M. 1961 : "Synagogue Architecture in the Late Classical Period," in Roth, C., ed., *Jewish Art: An Illustrated*

- History, Greenwich.
- Binder, D. D. 1999: *Into the Temple Courts. The Place of the Synagogue in the Second Temple Period*, Atlanta.
- Bonz, M. P. 1990: "The Jewish Community of Ancient Sardis: A Reassessment of Its Rise to Prominence," *Harvard Studies in Classical Philology*, vol. 93, 343-359.
- Burkhardt, N. and Wilson, M. 2013: "The Late Antique Synagogue in Priene: Its History, Architecture, and Context," *GEPHYRA*, vol. 10, 166-196.
- Claußen, C. 2002: *Versammlung, Gemeinde, Synagoge: das hellenistisch-jüdische Umfeld der frühchristlichen Gemeinden*, Göttingen.
- Cotton, H. ed., 2010: *Corpus Inscriptionum Iudaeae/Palaestinae*, vol. 1, pt. 1, *Jerusalem*: 1-704, Berlin.
- Cotton, H. ed., 2012: *Corpus Inscriptionum Iudaeae/Palaestinae*, vol. 1/2, pt. 2, *Jerusalem*: 705-1120, Berlin.
- Fine, S. ed., 1999: *Jews, Christians, and Polytheists in the Ancient Synagogue*, London & New York.
- Frey, J. B. 1975² (1936-52): *Corpus Inscriptionum Judaicarum*, vol. 2, New York.
- Goodenough, E. R. 1953: *Jewish Symbols in the Greco-Roman Period*, vol. 1-3, New York.
- Guralnick, E. ed., 1988: *Sardis: Twenty-Seven Years of Discovery*, Chicago.
- Hachlili, R. 1988: *Ancient Jewish Art and Archaeology in the Land of Israel*, Leiden.
- Hachlili, R. 1998: *Ancient Jewish Art and Archaeology in the Diaspora*, Leiden.
- Hachlili, R. 2013: *Ancient Synagogues Archaeology and Art: New Discoveries and Current Research*, Leiden.
- Hannemann, G. M. A. 1959: "Excavations at Sardis 1958," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*, no. 154, 5-35.
- Horbury, W. and Noy, D. 1992: *Jewish inscriptions of Greco-Roman Egypt: with an index of the Jewish inscriptions of Egypt and Cyrenaica*, Cambridge.
- Kitzinger, E. 1946: "A Survey of the Early Christian Town of Stobi," *Dumbarton Oaks Papers*, vol. 3, 81-162.
- Kohl, H. and Walzinger, C. 1916: *Antike Synagogen in Galilaea*, Leipzig.
- Kolarik, R. 1987: "Mosaics of the Early Church at Stobi," *Dumbarton Oaks Papers*, vol. 41, 296-306.
- Krabel, A. T. 1979^c (1995): "The Diaspora Synagogue: Archaeological and Epigraphic Evidence since Sukenik," in Uman, D. and Flesher, P. V. M., ed., *Ancient Synagogues, Historical Analysis and Archaeological Discovery*, Vol. 2, Leiden-Boston-Köln, 95-126.
- Kraeling, C. H. 1979^c (1956): *The Synagogue: The Excavations at Dura Europos, Final Report VIII*, part. 1, New York.
- Leon, H. J. 1960: *The Jews of Ancient Rome*, Philadelphia.
- Levine, L. I. 1981: *Ancient Synagogues Revealed*, Jerusalem.
- Levine, L. I. 2005: *The Ancient Synagogue*, Second Edition,

- New Haven and London.
- Lieberman, S. 1946: "Palestine in the Third and Fourth Centuries," *The Jewish Quarterly Review* 36/4, 329-370.
- Loffreda, S. 1997: "Coins from the Synagogue of Caphtarnaum," *Liber Annus*, vol. 47, 223-244.
- Magness, J. 2001: "A Response to Eric M. Meyers and James F. Strange," in Avery-Peck, A. J. and J. Neusner, J., ed., *Judaism in Late Antiquity*, pt. 3. *Where we Stand : Issues and Debates in Ancient Judaism*. vol. 4. *The Special Problems of the Synagogue*, Leiden, 1-48.
- Magness, J. 2012: *The Archaeology of the Holy Land*, Cambridge.
- Marmorstein, A. 1937: "The Synagogue of Claudius Tiberius Polychamnus in Stobi," *The Jewish Quarterly Review*, New Series, vol. 27, no. 4, 373-384.
- Meyers, E. M. and Meyers, C. L. 2009: *Excavations at Ancient Nabratein : Synagogue and Environs. Meiron Excavations Project* vol. 6, Winona Lake.
- Meyers, E. M. and Meyers, C. L. 2010: "Response to Jodi Magness's Review of the Final Publication of Nabratein" *BASOR* 359, 67-76.
- Milson, D. 2007: *Art and architecture of the synagogue in late antique Palestine : in the shadow of the church*, Leiden ; Boston.
- Netzer, E. 1996: "Review of the Synagogues at Gush Halav and Khirbet Shema'a," *Eretz Israel*, 25, 450-455 (Hebrew ; English summary : 106).
- Noy, D. 1993-1995: *Jewish Inscriptions of Western Europe*, 2 vols, Cambridge.
- Noy, D. 2004a: *Inscriptions Judaicae Orientis, I : Eastern Europe*, Tübingen.
- Noy, D. 2004b: *Inscriptiones Judaicae Orientis, III : Syria and Cyprus*, Tübingen.
- Rajak, T. and Noy, D. 1993: "Archisynagogoi : Office, Title and Social Status in the Greco-Jewish Synagogue," *Journal of Roman Studies* 83, 75-93.
- Rutgers, L. V. 1995: *The Jews in Late Ancient Rome : Evidence of Cultural Interaction in the Roman Diaspora*, Leiden.
- Seager, A. R. 1972: "The Building History of the Sardin Synagogue," *American Journal of Archaeology* 76/4, 425-435.
- Smallwood, E. M. 1976: *The Jews under Roman Rule : From Pompey to Diocletian*, Leiden.
- Sukenik, E. L. 1934: *Ancient Synagogue in Palestine and Greece*, London.
- Trebilco, P. R. 1991: *Jewish Communities in Asia Minor*, Cambridge.
- Trümper, M. 2004: "The Oldest Original Synagogue Building in the Diaspora : The Delos Synagogue Reconsidered," *Hesperia*, 73, 513-598.
- Urman, D. 1995: "Public Structures and Jewish Community in the Golan Heights," in Urman, D. and Flesher P. V. M. ed., *Ancient Synagogues, Historical Analysis and Archae-*

ological Discovery, Vol. 2, Leiden-Boston-Kohn, 373-618.

White, L. M. 1987: "The Delos Synagogue Revisited: Recent Fieldwork in the Greco-Roman Diaspora," *Harvard Theological Review*, vol. 80, 133-160.

White, L. M. 1996: *The Social Origins of Christian Architecture, I: Building God's House in the Roman World: Architectural Adaptation among Pagans, Jews, and Christians*, Valley Forge.

White, L. M. 1997: *The Social Origins of Christian Architecture, II: Texts and Monuments for the Christian Domus Ecclesiae in Its Environment*, Valley Forge.

Wiseman, J. and D. Mano-Zissi 1971: "Excavations at Stobi 1970," *American Journal of Archaeology* 75/4, 395-411.

Wiseman, J. and D. Mano-Zissi 1972: "Excavations at Stobi 1971," *American Journal of Archaeology* 76/4, 407-424.

Wiseman, J. and D. Mano-Zissi 1973: "Excavations at Stobi 1972," *American Journal of Archaeology* 77/4, 391-403.

Yeivin, Z. 2004: "The Synagogue at Eshtemoa' in Light of the 1969 Excavations," *Atiqot* 48, 155-158 (English abstract).

井上文則『軍人皇帝のローマ』、講談社、二〇一五年。
関谷定夫『シナゴーク・ユダヤ人の心のルーツ』、リトン、二〇〇六年。

ヒュッテンマイスター・F・G、ブレードホルン・H『古代のシナゴーク』(山野貴彦訳)、教文館、二〇一二年。
ベルナルル・レシー『ディオクレティアヌスと四帝統治』(大清水裕記)、白水社、二〇一〇年。

山野貴彦『新約時代におけるパレスチナのシナゴーク』『考古学から見た聖書の世界』(長谷川修一編)、リトン、二〇一四年、二二七～二五八頁。

註

(1) 正確には第一次ユダヤ戦争(六六～七三年)と第二次ユダヤ戦争(一三二～一三五年)によってユダヤ人がイスラエルから排斥された時期からキリスト教公認の三一三年までの時期を指すが、本稿では便宜上「二～三世紀」と表記する。

(2) さらに、最近の発掘調査によってあきらかにされている。Trümper 2004 に詳し。

(3) たゞ²⁴⁵ Avi-Yonah 1961, 155-156.

(4) 歴史的には「ユダヤ」あるいは「シリア・パレスチナ」と呼ばれているが、本稿では「イスラエル」と現国名で記す。

(5) バル・コホバの反乱については一九七〇年代からの発掘調査によって考古学的に明らかにされている。Hachlili 1988, 128-132 に詳し。

(6) なお、反乱の発端については二つの説がある。ディオによれば、ハドリアヌス帝がアエリア・カピトリーナの建設を計画したことが原因である(Dio, *Roman History*, LXXIX)。一方でヒストリア・アウグスタによれば、集会の禁止令が原因である(SHA *Hadr.* 14, 2)。後者は集会の禁止について明確には記していないが、次皇帝アントニヌス・ピウスが集会禁止令を緩和したと記されている

ので、ハドリアヌスについて一般にこのように解釈されている。Smallwood 1976, 429 に詳しい。

- (7) 日本人研究者には、関谷定夫 (二〇〇六年)、山野貴彦 (二〇一四年) が挙げられる。関谷はこれまでの著作の中で旧約・新約聖書時代の歴史と考古学を詳細且つ通史的にまとめている。山野は新約聖書時代を専門とし、イスラエルで確認されている初期シナゴークについて非常に詳しくまとめている。

- (8) たとえば、ヒュッテンマイスター (二〇一四年) 八四〜八七頁、Levine 2005, 319-320 に詳しい。

- (9) ただし、コラン高原のガリラヤ型シナゴークはエルサレムの方向に出入り口がない場合が多い。

- (10) たとえば最近のイスラエルでは、Cotton (eds.) 2010 がエルサレム出土の碑文を第一巻に集成しており、それ以外の地域についても徐々に集成されている (註 11 参照)。ディアスポラ地域の研究で、イタリア・ローマについては Leon 1960、トルコ (部分的) については Trebilco 1991、イタリア以外の西欧については Noy 1993-1995、東欧については同じく Noy 2004a、シリア・キプロスについては Noy 2004b、トルコ (全般) については Ameling 2004 などが挙げられる。

- (11) 原書は *Corpus Inscriptionum Iudaeae/Palaestinae* であり、第一巻 (エルサレム編二冊)、第二巻 (カエサレア及び中沿岸部編)、第三巻 (南沿岸部編) まで刊行されている。今後は、第四巻 (ユダヤ及びガイドゥメア編)、第五巻 (ガリラヤ編)、第六巻 (ネゲヴ編) が二〇二〇年までに

刊行予定とのことである。以下ホームページ参照。
<http://library.brown.edu/cds/projects/iip/info/about/> (筆者の最終閲覧二〇一七年三月三十一日時点の情報による)。

- (12) ラビ文献の規定によれば、シナゴークは町の中心部や高地に立地されるべきであったが、考古資料にその傾向は見られない (Levine 2005, 314-316)。

- (13) ただし、本稿の主眼はユダヤ戦争後のシナゴーク建設についてであるため、それ以前のシナゴークに関する研究史の整理は割愛したい。初期シナゴークについては、山野 二〇一四年や Binder 1999 で検討されている。また、ユダヤ戦争以前にはイスラエルにも多くのシナゴークが存在していたことが文献史料からも知られている。たとえば、Hachili 2013 は最近のイスラエル国内での発掘調査について網羅的に集成している。

- (14) Hachili 2013, 600 によれば、Kohl and Watzinger 1916; Forester 1992; Talbir 1995; Maaz 1996 などが挙げられる。

- (15) コッパでは、ナブラティン、グシユ・ハラヴ、ヒルベト・シェマン、メイロンを指す。

- (16) 建造物は、第二次ユダヤ戦争後から後二五〇年頃まで使用され (第一期)、その後三世紀後半に拡張された形跡がある (第二期)。七〇年以降に建てられたシナゴークとしては最も早いものであり、ガリラヤ地域のシナゴークの先駆けになったとメイヤースは考えている。Meyers and Meyers 2009, 27-67 に詳しい。

- (17) マグネスはこれまでの型式学に疑問を呈し、土器編年

を見る限りどの遺跡も五世紀以降であると主張する。また其伴遺物である貨幣については、メイヤーズが年代決定を誤っていた可能性を指摘している (Magness 2001)。

- (18) ベト・シェアリームはマザールによって一九三〇年代から調査されており、シナゴークは第一期と第二期が存在したとされている。第一期の層位から貨幣と土器、碑文が発見され、それらは三世紀の遺物と報告されたが、最終報告書が出されていないため、確かな見解が得られていない。筆者は二〇一五年に実現したが、私有地になっており遺構は確認できなかった。発掘当時の考古データについては、Wilson 2007, 326-328 に詳しい。

- (19) ウルマンはカッリンを含めゴラン高原のシナゴークを詳細にまとめている。特に以下の著書ではマオズの見解を積極的に取り上げた上で、改めて強調してカッリンのシナゴークを二―三世紀に年代付けている (Uрман 1995, 463-481)。

- (20) 筆者はマオズとキルブルの研究書 (Maosz and Killebrew 1986) を入手していたため、Hachlili 2013, 595-597 を参照した。

- (21) 筆者はバラグの研究書 (Barag 2006) を入手していたため、Hachlili 2013, 120-121 を参照した。

- (22) Levine 2005, 251 を参考。

- (23) Hachlili 1998 : Fine (ed.) 1999 : Noy 2004a : Noy 2004b の先行研究整理に基づへ。

- (24) 本稿では基本文献として Krabel 1979* (1995) : Hachlili 1998 : Clausen 2002 : Levine 2005 を参照した。

紀元二―三世紀の東地中海地域におけるシナゴークの建設

- (25) 町は紀元前三〇三年にセレウコス朝シリアによって建設され、ヘレニズム時代より軍事・交易の拠点として発展した。シナゴークは一九三二年にイエール大学とシリア考古局によって調査されている。Kraeving 1979 に詳しい。

- (26) ドウラは多言語地域であったが、一般にギリシア語が使用されていた。なお、シナゴークからの出土碑文はアラム語とギリシア語が大半であり、ヘブル語は部分的に用いられている。シナゴーク第二期の層から二四四―二四五年に年代付けられる碑文が発見されたことから、第一期の成立時期も明らかになった。先行研究、出土碑文の情報ともに Noy 2004b, 133-212 に詳しい (とりわけ当該碑文については 139-148 参照)。

- (27) 発掘調査以前にシナゴークのフレスコ画を実見したブレストッドによれば、当該壁画は東洋と西洋の文化が混在しており、且つ初期キリスト教美術の特徴と関連しているという。Fine (ed.) 1999, 176 に詳しい。ドウラのフレスコ画についてはとりわけ美術史・考古学の分野で広く議論されているが、本稿の主眼から逸れるため詳細には触れない。

- (28) 紀元前一世紀からローマ都市として栄え、四世紀にはテオドシウス帝も訪問したことで知られている。シナゴークの調査は一九三一年にジョン・ペトロヴィックによって着手され、一九七〇年代にワイズマンとマノ・ツィッスィによって再発掘されている (Marmorstein 1937, 373 ; Kitzinger 1946, 129 ; Kolarik 1987, 295 ; Hachlili 1998,

- 63: Noy 2004a, 57; Levine 2005, 270)。後者の発掘調査に
ついでに Wiseman & Mano-Zissi 1971; 1972; 1973 に詳
し。
- (29) ティベリウス・クラウディウス・ポリュカルモスの奉
献碑文として知られている。当該碑文については後述。
- (30) Kitzinger 1946, 81-161; Kolarik 1987, 295-306 に詳し
。
- (31) 出土碑文は、同様の名が刻まれたプラスター碑片が第
二期の建造物で再利用されていたことから (Noy 2004a,
73-74, Mac3: Mac4)、遡って第一期に年代付けられてい
る。第一期は出土遺物 (土器や貨幣) によって二三世
紀と同定されている。Noy 2004a, 59-60 に詳しい。また、
実際には第一期の下層から後期ヘレニズム時代の土器と
遺構が確認されているが (Wiseman & Mano-Zissi 1971,
408)、保存状態が悪く第一期との区別が考古学的に明ら
かにされていない。
- (32) 第一期と第二期の間には、火災の痕跡が見受けられる
(Hachili 1998, 65)。しかしその痕跡は部分的であったと
いう指摘もあり (White 1997, 348)、実際には火災ではな
く三世紀後半の大地震が第一期から第二期への移行であ
ったと可能性もあるという。Noy 2004a, 60 に詳しい。
- (33) より詳細なプランに ついでに Noy 2004a, 60-61 を参
照。
- (34) クラールベルは前者の立場であり (Krababel 1979, 115)、
ホワイトは後者の立場である (White 1997, 352)。
- (35) 紀元前四世紀にマケドニア王フィリッポス二世によつ
て建設された古代都市。シナゴークは一九八一年に偶然
発見された。その後ケスジャコヴァによって調査された。
筆者はその報告書 (Kesjakova 1989; 1999) を入手してい
ないため、Noy 2004a, 38-48; Levine 2005, 269-270 を参
照した。
- (36) シナゴーク発見当初、周辺状況は明らかにされていない
かったが、ケスジャコヴァは複合建造物をインストラと判
断している (Noy 2004a, 39)。
- (37) 「プロノイア」の解釈は様々であり、「イスラエルの神
による賜物」や「個人の財産、先見の明」といったもの
がある (Noy 2004a, 43-44)。
- (38) 損傷が酷く、正確な名前は明らかになっていない。ノ
イによれば、「ローマで使われたアエリウス (Aelius)
からの派生」、「イライアス (Elias)」、「ヘレン (Helen)
あるいはヘラス (Hellas)」、「ヘラニコス (Hellenikos)」と
いった見解もあるという (Noy 2004a, 47)。
- (39) ノイによれば、ダノヴは一九八四年の論文 (Danov,
H. M. & Kesjakova, E. 1984: "A unique find - an an-
tique synagogue at Philippopolis," *ASCEOB*, vol. 19,
210-226.) の中で、「コスミアス」、「コスモス」、「コスミア
等の名はユダヤ人の間で広く使用された」と述べている
というが、ノイはそのような事例が他に見られないとし
て反論している (Noy 2004a, 44-45)。
- (40) ノイによれば、ダノヴは前掲書で、「当該モザイクは
ゴート族の侵入直後に設けられ、その後もう一つのモザ
イクが追加された」と述べているという (Noy 2004a,

43)。

(41) 前四世紀にミユカレー山麓に建設された。由来は前七〜六世紀とされているが、正確にはわかっていない。碁盤目状の街区が特徴で、ヘレニズム時代を代表する都市である。

(42) Burkhardt and Wilson 2013によれば、当時は十分な検証が為されていないかった。

(43) 一つは建造物内のニッチ（壁龕）より発見された石材であり、メノラーと孔雀が表現されている。もう一つは前者よりも簡素なメノラーが刻まれた柱石であり、近隣から出土した。

(44) 筆者の二〇一五年の巡見調査に基づく。当該建造物の東側及び目抜き通りの対極に位置する住居跡は小規模な空間が重なる集合住宅（インストラ）の構造であった。

(45) 紀元前七世紀よりリュディア王国の首都であり、その後はペルシア帝国の主要都市として栄えた。ローマ皇帝ティベリウスの治世に大地震に見舞われたことにより、都市の大半が再建され、現在確認出来る遺構はローマ時代のものである。シナゴークは一九五八年よりハーバード大学とコーネル大学によって二〇年以上発掘調査が為された。

(46) シーガー (Seager 1972) の年代決定を複数の研究者が採用している。たとえば、Bonz 1990; Trebilco 1991; Hachili 1998; Levine 2005 が挙げられる。

(47) 筆者は二〇一五年の巡見調査で、ワシンのレリーフが施された高さ一メートルのテンプルやアプスを改変した一

紀元二〜三世紀の東地中海地域におけるシナゴークの建設

〇メートル近いベンチ等のその他遺構・遺物を実見した。

(48) ディアスポラ地域のシナゴークが住宅と隣接あるいは一つの構造物内に共存する事例については、ホワイトが明示している (White 1990, 62-77)。

(49) シナゴークと同様の意味を示す用語として「プロセウケー（祈りの家）」も挙げられるが、主に紀元前にエジプトで使用された傾向が強い。非常に多くの碑文が出土しているものの、本稿は二〜三世紀に焦点を当てているため、別の機会に論考することとする。

(50) 本稿では触れないが、こうした傾向はローマのカタコンベから出土している多数の墓碑にも見られる。ローマの事例は「アルキシナゴークス」や「シナゴークの父」、「デルシアルク」等の表記が見られるものの、墓碑の性格上、故人の立場や役職を表現することに留まっている。そのため、それ以上の情報を得ることが困難な状況にある。

(51) シナゴークを表す語については、ヒュッテンマイスター (二〇一四年) 一一〜二六頁に詳しい。

(52) 研究史については、Noy 2004a, 63; Macl によるとめられている。

(53) 本稿ではマルモルシュタインの解説も参考にした。(Marmorstein 1937)。

(54) ノイは「テトラストーンを「勉強部屋」と解釈している (Noy 2004a, 68)。

(55) パトリアルクはナスイ（総督）のディアスポラ地域での呼称であり、ローマ社会においては前者の名で知られ

ていた。パトリアルクの役割や文献での言及については、Levine 2005, 454-465 に詳しい。

- (56) デナリウスの価値は、地域・時代毎で大きく異なるため現代の通貨と比較することは有効ではないが、ローマ帝政期は一デナリウスが農業労働者の日給にあたりと一般的に考えられている。ベルナル・レミイ (二〇一〇年) によれば、ディオクレティアヌス帝時代 (二八四～三〇五年) にはインフレが進み、農業労働者の日給は二五デナリウス程度であった。なお、三世紀の経済については、井上 (二〇一五年) に詳しい。

- (57) フィリップ出土の墓碑には、「フラウィウス・ニコストラトウス・アウレリウス・オクシコリウスは自身のために墓を建てた。もし別の者の遺体を安置したい者がいれば、シナゴークに一〇〇〇〇〇デナリウス払うが良い」と記されている (Noy 2004a, 88-91, MacI2)。一方、テッサロニキの墓碑には、「マルクス・アウレリウス・ヤコブや生涯エウテュキウスと呼ばれ、彼の妻アンナはアシנקリティオンと彼と呼ばれていた。もし別の者を安置したい者がいれば、シナゴークに新鑄造貨幣の七五〇〇デナリウスを払うが良い」と新鑄造貨幣を支払うことを命じている (Noy 2004a, 95-98, MacI5)。その他にもニコメディアで同様の墓碑が二つ確認されている (Aneling 2004, 324-332)。

- (58) 研究史については Aneling 2004, 162-163, 36 にまとめられている。